

政党支持の安定性について

——マルコフ・モデルによる一試論——

高 坂 健 次

1 はじめに

個々の有権者はしばしば支持政党を変えることがある。さらに日本では「支持政党なし」の割合が他の国のそれに比べて高く、こうしたことが政党支持の流動性をもたらしている。しかしながら、他方、政党支持は他の政治的態度に比べると相対的に安定していると言われている（三宅一郎、『政党支持の分析』1985）。この一見パラドシカルな現象は興味ある問題である。三宅氏はこの問題を解くにあたって、「政党支持の幅の仮説」を提唱している。すなわち、政党支持態度を「絶対に支持する」から「絶対に支持しない」にいたる一本の連続体と見なすと、この連続体は支持、無関心、拒否の3つのゾーンに分けることができる。そのとき「支持」のゾーンに属する政党は一つであるとは限らず複数の政党が含まれていることが多い。いわゆる世論調査などで回答者によって表明された支持政党は、ありうる複数の支持政党群のなかの第一選択政党である。そして、時々政治状況や争点によって、第一選択政党は入れ替わるものの、その変動は「支持」というゾーンの枠の中での変動であり、変動に枠が設けられていることが結果として政党支持態度の安定性をもたらしているのではないか、というものである。政党支持の幅とは、ここで支持のゾーンと呼ばれているものにほかならない。議論の枝葉を切り落として要約すれば、以上のようなものである。私は、この「政党支持の幅の仮説」においては所与の政党に対する支持態度そのものの挙動のメカニズムが明らかにならないという難点があると考ええる。本稿は、この難点を克服するために同様の問題に対

して数理モデルによる分析という異なったアプローチを提案するものである。

もっとも、このモデルの妥当性を論証するためにはそれにふさわしい十分なデータが必要であり、本稿が基づいている調査（有権者調査：代表居安正）データのみでは不十分である。したがって、ここではデータの解釈や将来の予測もさることながら、重点は異なるアプローチの可能性の示唆にあることを前もって断わっておきたい。

2 準備的考察

私たちの調査では、まず「あなたが支持されている政党を1つだけお教えてください」（Q22）というかたちで支持政党を択一式で尋ねたのちに、「それでは、次の各政党について、それぞれの程度支持できるとお考えですか」（Q23）と各政党についての支持の度合を5段階で尋ねている。回答結果についてまとめてみよう（付表参照）。

1 当然と言えば当然かも知れないが、支持政党としてあげられた政党の支持度について見た場合、「絶対支持しない」は存在しない。「絶対支持しない」という気持ちを抱きながら、その政党を支持するというのは論理的に矛盾しているばかりでなく、実際にもそのような事例はみられない。

2 表明された支持政党についての支持度を見ると、「あまり支持しない」というケースは当然のことながら少ない。自民党支持者で3ケース、民社党・社民連でそれぞれ1ケースあるだけである。しかし、ここではそうした事例が少ないという事実よりも、むしろ「僅少ではあるが存在する」ということに着目しておきたい。すなわち、表明された支持政党であっても、その心的状態は「あまり支持し（てい）ない」こともありうる、いい

かえれば、「あまり支持しない」政党であっても他の諸政党にたいする支持状況や政治状況などからその政党を支持することはありうるのだ、と解釈したい。

3 では、表明された支持政党以外の政党に対する強い支持（＝「強く支持する」）はどうか。これも当然のことながら少ないけれど、全くないわけではない。例えば、自民党支持を表明した有権者のなかにも共産党を強く支持している人は1人いるし、民社党を支持している人は4人いる。社会党支持者（全部で206人）に至っては、他の政党（共産党、民社党、社民連）を支持している人が合計で9人もいるのである。

私はこれらの数字について、次のように考えた。もし、回答の選択肢が「強く支持する」ではなくて「絶対に支持する」と表現されていたとしたらやはり支持政党以外の政党に対しても「絶対に支持する」と表明したひとはゼロであったに違いない、と。強く支持すると言う表現になっていたために、複数の政党に対する「強い支持」が現れたものと解釈したい。（以下においては、したがって「強い支持」は「絶対に支持する」のあくまで代用的カテゴリーとして、推論を進めて行きたい。）

4 以上をまとめると、ある政党について「絶対支持」状態にいるものは他の政党の支持表明に至ることはまずありえない。また、「絶対不支持」の状態にいるものは、当該政党の支持を表明することはありえない。表明された支持政党が流動する有権者は、「ある程度支持する」という弱い支持、「どちらともいえない」という支持と不支持の境目〔＝必ずしも無関心とは思わない〕、「あまり支持しない」という弱い不支持の3つの状態のいずれかにいる有権者であろう。

5 最も大切なことは、ある政党に対する支持の表明を支える支持の度合はさまざまでありうる、ということである。仮に支持政党の択一的表明を「(外面的) 行動」ととらえ、支持度を「心的状態」と呼んで区別するならば、私たちは行動と心的状態とは互いに分析的に区別し、かつ両者は1対多の関係にあるものとして捉えるべきである。

経験的データに依拠した以上の考察は、問題の状況を吸収マルコフ連鎖としてモデル化できることを示唆している。次節においては、明示的にモデル構築を行うことにしよう。

3 政党支持のマルコフ・モデル

<公理1> 政党支持の程度に関して、行為者の所属する状態は5つあり、行為者はそのいずれか一つの状態に必ず所属する。それらの状態とは：

- 状態1 絶対支持
- 状態2 弱い支持
- 状態3 どちらでもない
- 状態4 弱い不支持
- 状態5 絶対不支持

先ほど述べたように、調査の中での選択肢の表現は「強く支持する」・「ある程度支持する」・「どちらともいえない」・「あまり支持しない」・「絶対に支持しない」の5つであるが、モデルにおいては上のように読み替えている。

<公理2> 状態1と状態5は、ともに「吸収状態」である。すなわち、行為者はある政党について状態1もしくは状態5にあるときには、時間が経過してもそれぞれの状態に滞留し続ける。それに対して、状態2、状態3、状態4はいずれも「非吸収状態」である。すなわち、行為者がそれらの状態にあるときには、一定の確率で他の状態に移しうるものとする。

<補助公理> 状態の推移はすぐ隣の状態へのみ可能とし、状態1に向けての推移確率は a とし、状態5の方向に向けての推移確率は b 、同じ状態に滞留し続ける確率は p とする。

実際には、状態を一つ飛ばして推移することもあれば、あたかも「転向」のように一方の極より他方の極にジャンプすることもあるかもしれない。しかし、すでにデータにみたように、後者の可能性はほとんどないし、前者についても補助公理のように仮定するのがまずは妥当であろう。さ

らに、推移確率については、ここでは簡単のために、状態3から状態2への推移確率も状態2から状態1への推移確率もともにaだと仮定している。bについても同様である。aを「支持化パラメータ」、bを「不支持化パラメータ」と仮に名付けておく。もちろん、 $a + b = 1$ である。

<公理3> 状態間の推移（あるいは非推移）は、離散的な時間域 T ($t=1, 2, \dots$) においてなされる。

<公理4> 行為者が調査時点で表明した支持度が、初期状態である。

調査時点が初期状態と見なすべき根拠はない。調査が細かなパネルデータでない以上、ある程度の恣意的仮定はやむをえない。

以上の公理に基づくモデルを、グラフの形で図示してみよう。状態間の推移過程は、次のような推移確率行列 P として表現できる。

$$P = \begin{matrix} & \begin{matrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \end{matrix} \\ \begin{matrix} 1 \\ 2 \\ 3 \\ 4 \\ 5 \end{matrix} & \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ a & p & b & 0 & 0 \\ 0 & a & p & b & 0 \\ 0 & 0 & a & p & b \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \end{matrix}$$

この行列 P について、「吸収状態」ばかりを集めて、再配列すると：

$$P = \begin{matrix} & \begin{matrix} 1 & 5 & 2 & 3 & 4 \end{matrix} \\ \begin{matrix} 1 \\ 5 \\ 2 \\ 3 \\ 4 \end{matrix} & \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 0 \\ a & 0 & p & b & 0 \\ 0 & 0 & a & p & b \\ 0 & b & 0 & a & p \end{bmatrix} \end{matrix} = \begin{bmatrix} I & 0 \\ R & Q \end{bmatrix}$$

吸収マルコフ連鎖の公式に基づいて、基本行列 N を求めると：

$$N = (I - Q)^{-1} = \left[\begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} p & b & 0 \\ a & p & b \\ 0 & a & p \end{pmatrix} \right]^{-1} \\ = \left[\begin{pmatrix} 1-p & -b & 0 \\ -a & 1-p & -b \\ 0 & -a & 1-p \end{pmatrix} \right]^{-1} \\ N = \frac{1}{(1-p)[(1-p)^2 - 2ab]} \begin{bmatrix} (1-p)^2 - ab & b(1-p) & a^2 \\ a(1-p) & (1-p)^2 & b(1-p) \\ a^2 & a(1-p) & (1-p)^2 - ab \end{bmatrix}$$

N_{ij} は i 番目の「非吸収状態」から出発した場合、システムが j 番目の「非吸収状態」に滞留する平均時間を示している。 N_{ij} を j に関して足すと、システムが吸収状態に至る以前に（3つの）非吸収状態にある時間の合計が得られる。さらに：

$$B = NR = \frac{1}{(1-p)[(1-p)^2 - 2ab]} \begin{bmatrix} a[(1-p)^2 - ab] & b^2 \\ a^2(1-p) & b^2(1-p) \\ a^2 & b[(1-p)^2 - ab] \end{bmatrix}$$

となり、 B_{ij} はプロセスが i 番目の非吸収状態から出発した場合、 j 番目の吸収状態に最終的に入る確率を示している。ここで、

- $i=1$ （「弱い支持」）
- $i=2$ （「どちらでもない」）
- $i=3$ （「弱い不支持」）

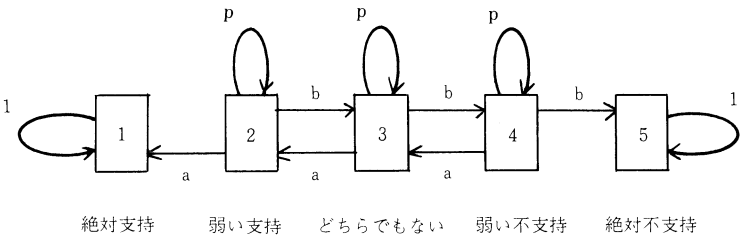


図1 モデルのグラフによる表現

j=1 (「絶対支持」)
j=2 (「絶対不支持」)

以上で、モデル構築は完了した。つぎは、パラメータの推定とモデルの分析である。

4 パラメータの推定

このモデルにおけるパラメータは、 a , p , b の3つ、 $a+p+c=1$ だから事実上2つの未知数である。パラメータの推定は一般には、データから観察可能な変数を特定化し、その期待値を求めることによって未知数を解き、期待値をそれに対応する観測値によって置き換えることによって行われなければならない。しかし、上のモデルに関してはパラメータの推定に必要なデータを欠いている。したがって、ここでは次善の策をとらざるをえない。

まず、支持化パラメータと不支持化パラメータの意味を考えてみよう。例えば、支持化パラメータとは、表明された政党以外の政党に対する拒否 [=絶対不支持+弱い不支持] の確率として理解することができる。すなわち、他の政党に対する拒否の確率が高ければ、それは表明された政党に対する支持がいっそう強まることを意味すると考えられるからである。反対に、不支持化パラメータとは、表明された政党以外の政党に対する支持 [=絶対支持+弱い支持] の確率として概念化されよう。すなわち、他の政党に対する支持の確率が高ければ、それは表明された政党に対する支持がいっそう弱まる [=拒否の方向に近づく] ことを意味すると考えられる。滞留パラメータは、表明された支持政党以外の政党に対する「どちらでもない」 [=無差別] 確率として概念化できる。

ここでパラメータの推定の必要上、追加公理を導入しよう。

<追加公理1> 表明された支持政党以外の政党について表明された支持度は、当該行為者にとって安定したものである。

<追加公理2> 表明された支持政党以外については、等確率で支持度の判断の機会を与えられ

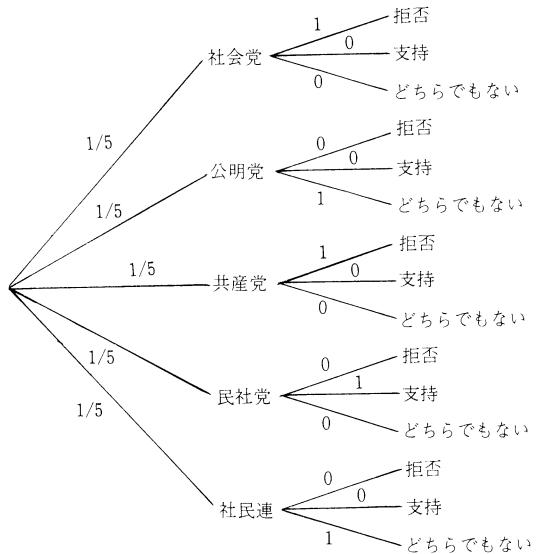
る。

仮説的なケースを例に、ここで私が意図している一連の手続きについて説明することにしよう。

仮説的例： 表明された支持政党： 自民党
他の政党に対する支持度（支持の状態）

社会党 4 (弱い不支持)
公明党 3 (どちらでもない)
共産党 5 (絶対不支持)
民社党 2 (弱い支持)
社民連 3 (どちらでもない)

追加公理を念頭において、表明された支持政党以外の政党に対する拒否・支持・どちらでもない・確率の期待値を求めてみよう。



$$E[P \text{ (他政党の拒否)}] = 1/5 \times 1 + 1/5 \times 0 + 1/5 \times 1 + 1/5 \times 0 + 1/5 \times 0 = 2/5$$

$$E[P \text{ (他政党の支持)}] = 1/5 \times 0 + 1/5 \times 0 + 1/5 \times 0 + 1/5 \times 1 + 1/5 \times 0 = 1/5$$

$$E[P \text{ (他政党の無差別)}] = 1/5 \times 1 + 1/5 \times 0 + 1/5 \times 0 + 1/5 \times 0 + 1/5 \times 1 = 2/5$$

ここで、 $E[P \text{ (他政党の拒否)}]$ をパラメータ a の推定値、 $E[P \text{ (他政党の支持)}]$ をパラメータ b の推定値、 $E[P \text{ (他政党の無差別)}]$ をパラメータ p

の推定値とすればよい。

ひとたび a 、 p 、 b の推定値がデータから求められれば、おのおのの行為者について、その行為者が非吸収状態から出発した場合、最終的に表明された支持政党を「絶対支持」する確率と「絶対拒否」する確率を求めることができる。さらに、集計として、表明された支持政党に対する最終的な支持数を計算することができる。次にその結果を見てみよう。

5 計算結果と考察

まずは計算結果を示し、そこから分かることを摘記しよう。総数とは、それぞれの政党について実際に回答者によって表明された支持者の数である。 a 、 p 、 b はおのおのの回答者について推定したものの平均である。 e はおのおのの回答者が調査時点で所属している状態から出発して「絶対支持」に入る確率の平均である。

期待値と略称している値は、すでに吸収状態 [= 絶対支持] にある (とみなした) 行為者の数と、ある非吸収状態にある当該行為者が最終的に「絶対支持」の側の吸収状態に入る確率を足して、その合計を求めたものである。したがって、この数値は最終的に当の政党を絶対的に支持するであろう人の数を示している。この期待値と調査時点での支持者の総数とを比べてみると、意外なほど開きは少ない。つまり、このモデルが正しいとすれば、予想される最終的な政党支持の分布と、現時点で表明された政党支持の分布はかなりの程度一致するということである。私は、この一致を「政党支持の安定性」と結びつけて解釈したい。すでに論じてきたように、このモデルでは、表明された支持政党にたいする心的状態は吸収状態から

出発しない限り、「弱い支持」・「どちらでもない」のみならず「弱い不支持」をも含めて3つの非吸収状態の間を一定の確率で行ったり来たりすることが想定されているのである。

パラメータでみれば、圧倒的に $a > b$ という関係がなりたってはいるけれども、それでも b が 0.2 にも及んでいるのに e [= 非吸収状態から出発して吸収状態 1 にいたる確率の平均] の値が高い、あるいは支持者の総数と期待値の差が小さいという印象をもつ向きもあるかも知れない。しかし、これは同じ非吸収状態と言っても状態 2 [= 弱い支持] から出発している (と私たちがデータから想定した) 行為者がそれ以外の非吸収状態から出発している行為者に比べて圧倒的に多いという事実に基づくものである。具体的なパラメータの値の如何にかかわらず、状態 2 から出発した方が状態 3 から出発するよりも、状態 3 から出発する方が状態 4 から出発するよりも、状態 1 に吸収される確率が高いことは、第 1 節の式から一般的に証明することが簡単にできる。

もっともこのモデルでは、ある非吸収状態にいる行為者が実際にどの政党をどの程度の確率でもって支持するかのメカニズムについては取り込めていない。しかしながら、行為者が吸収状態に入るまでの間、非吸収状態の間を何度か推移するであろうということは、当然の含みとして、表明されるであろう支持政党はゆれうごくと考えられる。(状態 2 や状態 3 から出発した場合、状態 4 に留まる平均回数は基本行列 N から容易に計算できるし、状態 4 にありながらその政党の支持を表明することはまれであるから、この平均回数をもって当該政党に対する絶対支持に至るまでに他政党支持に一時的に鞍替えする回数と見なすことは可能である。) その時々「政党支持の分布の流動

表 1 各政党支持表明者別の推定パラメータの平均と支持者の期待値

	総 数	a	p	b	e	期待値
自民党支持表明者	420	0.67	0.24	0.10	0.97	409.44
社会党支持表明者	192	0.61	0.23	0.16	0.96	184.96
公明党支持表明者	40	0.56	0.21	0.22	0.99	39.62
共産党支持表明者	57	0.66	0.20	0.14	0.97	55.10
民社党支持表明者	49	0.50	0.26	0.24	0.95	46.41
社民連支持表明者	12	0.57	0.25	0.18	0.89	10.73

(ただし、 $e = B_{\cdot 1}$)

性」の原因はこうした揺らぎにある、と理解したい。

では、行為者はそれぞれの政党について「絶対支持」という吸収状態に入るまでにどれくらいの平均時間がかかるだろうか。この平均時間は、第2節で求めた基本行列 N の要素の各行毎の和から計算することができる。次にその計算結果を掲げておく。

表 2 「弱い支持」から出発した場合、「絶対支持」に吸収されるまでの非吸収状態における平均滞留時間

自民党支持表明者	1.73
社会党支持表明者	2.10
公明党支持表明者	2.50
共産党支持表明者	1.61
民社党支持表明者	2.91
社民連支持表明者	2.34

これで見ると平均時間に著しい差があるともいえないけれども、6つの政党の間では共産党支持表明者の平均時間が一番短く、民社党のそれが一番長い。平均時間の長さは、当該政党支持の安定性とかかわっており、平均時間が短ければ短いほど安定的だと言える。すなわち、ここでは政党支持（一般）の安定性のみならず、とりわけ共産党支持の安定性が示唆されていると言ってよい。共産党について安定しているのは、自民党である。

ここで、再び表 1 に戻ろう。パラメータの a 値の大きい順に政党を並べるとこれはちょうど b を小さい順に並べた格好になっている。すなわち、自民、共産、社会、社民、公明、民社の順に「支持化」に向かう確率は高く、「非支持化」に向かう確率は小さい。ここでも自民党、共産党の安定性と、公明党、民社党の不安定性が示されている。もっとも、公明党支持者の「不安定性」については、やや意外と受け止める向きがあるかもしれないが、付表を見れば分かるように、これは公明党の支持表明者のなかに自民党支持、社会党支持、民社党支持、社民連支持が結構多いことによる。

パラメータ p の値は、民社党支持者が一番大きく社民、自民、社会、公明、共産の順になってい

る。この値だけで独立に解釈できる余地は少ないが、民社党支持者の a の値が相対的にかなり低いことと併せて考えれば、かなり特徴的だといえる。

政治的態度や投票意志の変容についてマルコフ連鎖モデルを応用しようという試みは、例えば、Anderson, T.W. (1954) Probability Models for Analyzing Time Changes in Attitudes (in P. F. Lazarsfeld ed. *Mathematical Thinking in the Social Sciences*) にまで遡る。その後は、どういうわけかこの種のテーマでマルコフ連鎖モデルを応用しようという試みはあまりないように思われる。かつて三宅氏もマルコフ型モデルの応用可能性について論じたことはあったが、むしろ問題点を強調するにとどまっている（三宅一郎『政党支持の流動性と安定性』『現代日本における政治態度の形成と構造』年報政治学1970 日本政治学会編）。

しかしながら、本稿で試みたように依然としてマルコフ連鎖モデルは有効性をもっている、と思う。他方、政党支持に関する研究は、現在むしろ盛んだと言ってもよい状況があるが、大半は統計的・計量的研究に偏っていることは否めない。本稿はその研究上のアンバランスを少しでも解消するためのものである。統計的・計量的研究と数理的研究とは終局的には協力しあえるものであるとしても、認識目的や研究戦略は大きく食い違っている。後者は当該社会現象に働いていると思われるメカニズムを表現し、そのメカニズムを一般化することによって現象を説明しようとするのに対して、前者は与えられたデータ——これは時間的・空間的に個別的な事象、その意味において経験的・歴史的現象である——の記述と説明が主な狙いである。

ここでのモデル分析においては、ある政党に対して終局的に「絶対支持」に推移する人々の期待値は求まるけれども、他政党を支持していた人びとのなかからどの程度その政党支持に回ってくるかを予測することはできない。これについては別のモデルを工夫しなくてはならない。

6 補論

最後に、直接的には本モデル分析とは関連しないけれども、「支持政党なし」と答えた人々について興味深い結果とそれをめぐる一解釈を示しておきたい。「支持政党なし」と答える人々が少なくはないこと、そうした人々の投票行動が選挙結果に重大な影響をもたらしているらしいことについては、すでに多くの指摘がなされている（たとえば、新しくは、松本正生『世論調査と政党支持』1991 法政大学出版局）。また、「支持政党なし」層の増大と社会党の低落とは関連があるのではないかという指摘もなされていることは、周知のとおりである（たとえば、直井道子・徳安彰「政党支持意識」原 純輔編『現代日本の階層構造② 階層意識の動態』1990 東京大学出版局）。同じく「支持政党なし」と答えても全ての政党に対して心理的に等距離にあることは考えにくい。例えば、或る政党に対しては潜在的に支持的であるのに対して、他の政党に対しては絶対不支持といったことは十分にありうるだろう。私たちの調査においては、この点について直接的に尋ねてみた。すなわち、「あなたが支持されている政党を1つだけ教えてください」との問によって、政党（「支持する政党はない」を回答選択肢を含む）を選んでもらったのに続けて、「それでは、次の各政党について、それぞれの程度支持できるとお考えですか。すべての政党について、あてはまる番号に○をつけてください。」と尋ねたわけである。後者についての回答選択肢は、「強く支持する」、「ある程度支持する」、「どちらともいえず」、「あまり支持しない」、「絶対に支持しない」の5段階である。前者の設問に対して、「支持する政党はない」と答えた人のみについて、後者の設問に対する回答を集計したものが付表の7である。この種のデータは、私の知る限り、ない。

付表の7を通して、いくつかの興味あることがわかる。まず、「支持政党なし」と答えている人の多くは、潜在的に自民党支持か社会党支持かのいずれかである。他の諸政党を支持すると答えている率はきわめて少ない。さらに、「支持政党なし」

と答えている人のなかには、公明党と共産党を「絶対に支持しない」ひとが多い。「支持政党なし」と答えた人は、民社党と社民連については、どちらかといえば不支持である。「支持政党なし」と答える人々はいわゆる浮動票とは完全には重ならないかもしれないが、浮動票の多くの部分を担っているとみてまず間違いはないであろう。すなわち、「支持政党なし」の動向が、その時その時の選挙結果の動向をかなりの程度左右しているものと思われる。

ここで興味あることは、「支持政党なし」がそれぞれの政党に対して潜在的に抱いている支持傾向の重なり具合である。たとえば、自民党を潜在的に支持している人と社会党を潜在的に支持している人との重複程度である。もし、その程度が小さければ、一方の政党の潜在的支持の掘り起こしの成功は、他方の政党の潜在的支持の掘り起こしに対する打撃を意味する。もし、その程度が大きければ、両政党の「連合」もしくは「共闘」が両政党にとっての得策であることを含意する。こうした潜在的支持の重複程度については、二つの政党に対する支持態度をクロスさせてみることによってわかる。ここでは逐一取り上げないが、例えば社会党に対する支持態度と他の政党に対する支持態度とをクロスさせてみると、重複程度の高いものから、自民党、社民連、民社党、共産党、公明党という順番になっている。

政党間の合従連衡は、現実的にはその時どきの制度化された権力布置、すなわち、例えば議席数の分布によって画策されることが多いであろう。しかし、その合従連衡はその次の機会における投票行動を左右し、ひいては次の時点での制度化された権力布置を規定するであろう。「支持政党なし」の綿密な検討は、可能な合従連衡の帰結を予測する上で大きな意味を持つであろう。これについては、稿を改めて述べることにしたい。

[本稿は、1989-90年度科学研究費総合研究 A (代表: 居安正)「地域社会の政治構造と政治意識の総合研究—近畿圏を中心として—」の成果の一部である。内容の要点は、第11回数理社会学会大会 (1991年3月30-31日: 北海道大学) において報告した。]

付表 支持政党別の支持度

1 自民党支持表明者

	強い支持	弱い支持	どちら でもない	弱い不支持	絶対不支持	合計
自民党	217	236	11	3	0	437
社会党	0	69	132	141	81	423
公明党	0	15	67	129	217	428
共産党	1	12	28	84	307	429
民社党	4	82	152	112	77	427
社民連	0	28	143	127	128	426

2 社会党支持表明者

	強い支持	弱い支持	どちら でもない	弱い不支持	絶対不支持	合計
自民党	0	40	35	68	55	198
社会党	97	107	4	0	0	208
公明党	0	11	26	61	98	196
共産党	3	30	42	50	72	197
民社党	1	25	61	56	54	197
社民連	5	40	72	48	32	197

3 公明党支持表明者

	強い支持	弱い支持	どちら でもない	弱い不支持	絶対不支持	合計
自民党	0	10	7	15	11	43
社会党	0	19	11	9	4	43
公明党	38	6	1	0	0	45
共産党	1	0	2	9	30	42
民社党	0	8	14	15	6	43
社民連	0	11	15	8	8	42

4 共産党支持表明者

	強い支持	弱い支持	どちら でもない	弱い不支持	絶対不支持	合計
自民党	0	3	8	14	32	57
社会党	1	26	17	9	4	57
公明党	0	0	5	6	46	57
共産党	43	15	1	0	0	59
民社党	0	3	9	16	29	57
社民連	0	8	17	12	20	57

5 民社党支持表明者

	強い支持		弱い支持		どちら でもない	弱い不支持	絶対不支持	合計
自民党	0	31	12	6	3	52		
社会党	0	10	20	15	6	51		
公明党	0	2	9	16	24	51		
共産党	0	3	5	7	36	51		
民社党	30	21	1	1	0	53		
社民連	3	12	23	7	5	50		

6 社民連支持表明者

	強い支持		弱い支持		どちら でもない	弱い不支持	絶対不支持	合計
自民党	0	0	2	7	3	12		
社会党	0	7	4	1	0	12		
公明党	0	2	1	3	6	12		
共産党	0	0	4	3	5	12		
民社党	1	1	4	2	4	12		
社民連	4	6	1	1	0	12		

7 「支持政党なし」表明者の各政党に対する支持度

	強い支持		弱い支持		どちら でもない	弱い不支持	絶対不支持	合計
自民党	1	150	179	106	56	492		
社会党	0	153	249	66	23	491		
公明党	1	15	136	143	194	489		
共産党	1	42	147	125	172	487		
民社党	1	41	226	133	87	488		
社民連	2	50	255	166	65	488		